

第14回せいい看護学会学術集会

—会長講演—

異業種コラボレーション—あらためて看護の専門性を考える—

春日三千代¹⁾

1. 袋井市立聖隷袋井市民病院の紹介

袋井市立聖隷袋井市民病院（以下、当院）は、2013年5月聖隷福祉事業団が指定管理者として受託運営を開始、公設民営、急性期病院の受け皿として回復期・慢性期の医療を担っています。その背景には、掛川市立総合病院と袋井市立袋井市民病院が合併し急性期の医療を担い、慢性期の医療を当院が担うという地域医療構想によるものでした。当院は、2023年5月開院から10年経過した。11年目を迎え、新たなステージに上がるという意味を込め、“Episode2新しいことに挑戦し続ける、選ばれる病院「地域NO.1」を目指す”と掲げ歩み続けています。

2. 異業種コラボレーションのきっかけ

異業種コラボレーションのきっかけは、袋井市からの声かけでした。2021年12月ふくろい産業イノベーションセンター主催の「医療・介護・福祉業界交流会」に参加しました。静岡県理工科大学の飛田和輝先生の「施設内における車いすの移動補助用誘導ロボット」という講演を聴きました。講演では、介護施設の中で行われる日々の介護業務ややらなければならない事）において、ほとんどが当然ですが人が人を支援するという事、その中でも車椅子への移動が多いということ、それに加え、人の手や人の力を使って行われ、ほとんど機械は使われていない、人力ということにとっても驚いたと言っていました。飛田先生は「もっともっと、ICTや支援ロボットなどを導入し、人の仕事をアシストしてあげれば、介護する人も介護を受ける人も、安全に仕事ができる、安全に介護が受けられ、日常生活が送れるのではないかと話されていました。

3. ふくろい産業イノベーションセンター主催の医療・介護・福祉業界交流会

交流会の趣旨は、異業種をまじえて医療・介護・福祉の現場の困りごとを共有するというものでした。患者さんの動きを察知して転倒を防ぐため離床センサーを使っているけれど、離床センサーに振り回されて患者さんと話がしたいと思っても、次のセンサーが鳴って行か

なきゃいけない、そのセンサーがどこで鳴っているのかわからない、それがトイレのコールなのか、何のコールなのかかわからないと言った声が聞かれました。また、コールが活用できない患者さんも多い中、トイレでの排泄行為に関しては、患者さんの羞恥心に配慮しながらの転倒予防に難渋している。排泄が終わるまでドアの前で待っていても、排泄が終わり立ち上がった瞬間に転倒してしまう事例や、待っている間も別の患者のコールが鳴りその場を離れざるを得ない状況になることなど、どの施設でも同じような事象が起っていました。看護職や介護職からは、便座からお尻が離れるとお知らせランプやコールが鳴るものが欲しいというような、患者の行動に合わせて、危険を察知し回避するための道具や方法を求める声があがりました。私自身は交流会に参加しながら「そうは言っても、なかなか異業種の人に看護の現場の苦勞ってわからないんじゃないかな」「言葉で言ってどれだけわかるのか」と思い、ここで話した事がどこまで発展していくのかと疑心暗鬼でした。一方、異業種の皆さんは、自分たちの知識や技術、ノウハウ、仕組みを使えば何かできる事がある、その事を分かってもらいたい。だから、どんなことに困っているのか、それは具体的にどんな状況か、熱心に耳を傾けてくれていました。これは、力になりたいからもっと教えて欲しいというメッセージだったのではないのでしょうか。語れない自分、困っていることをうまく伝えられない、そういう自分がとてももどかしかったと記憶しています。

4. 療養、治療を受ける患者さんにとって良くなったこと

異業種コラボレーションを考えている時に、いつも思いつくことがあります。

患者さんにとって良くなったこと、これは異業種コラボレーションというか、医療の知識・技術の進歩に伴い、患者さんの不快や苦痛を最小限にケアや処置を行えるような製品も開発されています。私が、中堅看護師として働いていた時の経験をお話します。

1) 口腔ケア

患者さんの口腔ケアは、綿花にイソジンガーグルを浸し、手袋をつけて口腔内を清拭していました。綿花で口

1) 袋井市立聖隷袋井市民病院 看護部長

腔ケアをおこなうと、乾燥した口腔内や歯に綿花が残り、きれいにならない、患者さんには不快感が残るという状況でした。しかし、口腔ケアスポンジを使うようになり、こびりついた痰や汚れがしっかり落ちる、患者さんの不快感も綿花でのケアに比べたら減ったのではないかと思います。

2) 褥瘡治療

褥瘡治療は、被覆材が開発される前は、イソジンシュガーとガーゼによる処置・治療が多かったのではないかと記憶しています。40歳代の肺癌の患者さんですが、腸骨に大きな褥瘡がありました。褥瘡の治療はエビデンスが湿潤環境と言われる今では考えられませんが、乾燥、日光浴と言った方法も行われていました。大きな深い褥瘡は、いつまでも治らない。患者は、いつも同じ向きを強いられていた事を思い出します。しかし、大きな深い褥瘡も処置の回数が少なく、患者さんの負担も少ない「陰圧閉鎖療法」によって、比較的治癒の過程も早くなりました。

3) とろみのついた水分、食事

朝食にお味噌汁が出てくるのですが、嚥下が難しそうな患者さんに対して、リハビリ科の医師から「とろみがあったほうがいいよね」と言われ、看護師がお味噌汁にとろみつけて提供していました。熱すぎたり冷たいものにとろみをつけると、だまになったり、とろみがつきすぎたりして上手くいきませんでした。忙しくバタバタしている時間に、一生懸命とろみ具合を調節しても患者さんは食感が悪いため、まずいと言われてしまうことも多々ありました。今では、栄養課がとろみのついた食事を提供してくれています。そして、とろみのついたお茶や飲み物がでてくるサーバーもあり、すごい進化だと思っています。

4) 疼痛コントロール

担当看護師として、40歳代の肺癌の患者さんを受け持っていました。肺癌の骨転移があり、モルヒネシロップを最大量使っても痛みが取れない、痛みが緩和されても、怖くて大好きな入浴ができないという状況でした。その方は、最期まで入浴する事ができないまま亡くなってしまいました。この時夜勤をしていたのですが、勤務が終わってから熱いお湯で亡くなった患者さんの身体を拭きながら、たくさんの垢がでてくるのを見て「本当にお風呂に入りたかった」のに、お風呂に入れてあげられなくて申し訳なかった事を思い出します。今では、緩和ケアが確立され痛みをコントロールしながら、その人らしく日常生活を送ることもできるようになってきました。

5. 労働力の減少

総務省の報告では、日本の生産年齢人口も1995年8,716

万人をピークに減少、2021年7,450万人、そして2050年には5,275万人と推測されています。生産年齢人口の減少は、労働力の不足に繋がります。2025年は、いわゆる団塊の世代が、すべて75歳以上となり医療・介護の需要がピークとなります。厚生労働省(2016)は、介護人材の需給推計2025年(確定値)について、需要は約253万人、供給は215万人、需要と供給には37.7万人のギャップがあると報告しています。このギャップは、当たり前ですが介護が必要な人がいても介護をする人がいない事を示しています。介護力、労働力の不足を補うための施策として厚生労働省ホームページに「総合的な確保方策」として主要施策があがっていました。労働力の確保として裾野を広げ新しい人、多様な人材の参入促進を図る。また、今まで介護の業界にかかわりのなかった企業や産業の知識やノウハウを取り入れ、介護職に就いた人材の定着を図り、労働環境・処遇改善を目指す。そして、介護に携わる人材育成、質の向上があげられていました。

看護も同じようにいつの時代もマンパワー不足です。看護師の配置基準が増えても、看護を必要とする人は変わらず多いと実感しているのではないのでしょうか。複雑で多様な慢性疾患、認知症、高齢者、家族背景の変化(独居、老老介護、認認介護)など多岐にわたる現状は変わりません。私たちは、看護職として病院や介護施設などで、今まで以上にこれから先も患者さんの安全や心地よい生活環境、その人らしさを尊重した看護の実践が、当然の事ながら求められています。その人らしさを尊重した看護を実践するために、看護や医療ではない人(異業種)の知識やノウハウを使って、本来、看護がやらなければいけないことに時間を割くことができればいいと思います。

看護職員の人材確保に関しては、看護師等の人材確保の促進に関する法律(平成4年法律第86号)第3条に基づき、看護師等の確保を促進するための措置に関する基本的な指針が策定されています(平成4年12月25日文部省・厚生省・労働省告示第1号)。2019(令和元)年、第11回看護職員需給分科会の報告では、2025年における需要推計は、180万人でした。これに、ワークライフバランスの充実を前提に看護職員の超過勤務時間や有給休暇の取得日数など勤務環境改善について、看護職員の労働環境の変化に対応して幅を持たせ、三通りのシナリオを設けて推計したところ、現在175万人いますが、需要推測は188万人~202万人であると報告されています。このような状況のなか、限られた人材で看護の専門性を発揮したいことや、多職種連携や協働が言われていますが、リハビリの療法士、栄養士、薬剤師、それだけでは限界があるのではないと思います。これから先は、やはり異業種の知識、ノウハウ、アイデアを活用して、効率よく、患者・家族のために看護をしたい。そのために、看工連

携に着目したいと考えました。効率よくと言うのは患者さんファースト、私たちがいくら働きやすくても、患者さんにとってよく無いものは、絶対使ってはいけないと思います。しかし効率よく患者家族にとってもよいもの・事を目指すのは本当に難しいと思います。

6. 既に取り組みされている異業種コラボレーションの紹介

1) 農福連携の推進 “ノウフク”

農業の世界も当然の事ながら、農業者も高齢化が進み、それに伴い農業者数の減少、耕地面積の減少が課題となっています。そこで、農業をする人を増やすための一つの方策として農業と福祉の連携に着目した“ノウフク”が推進されています。ノウフクは、農林水産省が取り組んでいる事業になります。ノウフクによって、障害者等が農業分野で活躍することを通じ、自信や生きがいを持って社会参画を実現していく、農福連携に取り組むことで、障害者等の就労や生きがいづくりの場を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業分野において、新たな働き手の確保につながる可能性があるとして述べられています。また、各種調査によれば、農業経営体における労働力の確保や売上増加に加え、障害福祉サービス事業所における賃金・工賃の向上や障害者の心身状況の改善など、農業と福祉の双方に良い効果をもたらすことが明らかであると紹介されています。

2) 看工連携

伊藤（2018）によると、看工連携は、医療現場全般のニーズに工学分野のシーズ（知識、ノウハウ、アイデアなど）で応える医工連携の中でも、とりわけ看護領域に着目した連携を目指し、看護師が抱える臨床現場の困りごとを解決するために、看護師と工学分野のものづくり企業が連携して製品開発などを行うと紹介されています。以下、日経デジタルヘルスより引用『看護師が業務中に使用する器具に関しては「薬機法（医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律）の認証を必要としないものも多いから」と大田区産業振興協会 ものづくり・イノベーション推進課長医工連携担当室長兼務の池田真司氏は説明する。看護師が持つニーズの中でも、薬機法の認証を必要としない「雑品」に着目した』と述べられ、吸い飲みに代わる「誤嚥防止用噛むストロー」が紹介されていました。看護師の困りごとは、横になったまま「吸い飲み」を使うと患者がむせてしまうことです。そこで、ストローの一部がポンプになっており、ポンプを噛むことでシャワーのように水が口の中に広がるといった仕組みになっているそうです。誤嚥防止用噛むストローは「国際モダンホスピタルショー2018」（2018年7月11～13日、東京ビッグサイト）で「第11回

みんなのアイデアde賞」準グランプリを受賞しているそうです。このように、私たちが、患者さんに行うケアや援助で使うものが商品として開発されるのは、とても嬉しいことです。

7. 看護の専門性

多職種連携が推進されるなか、それぞれの職種が専門性をもって患者・家族に関わっています。その中でも看護にしかできないことは何かと考えると、看護師というのは、患者さんだけでなく、患者さんの家族がどのような思いで患者さんを見ているのか深く考えています。患者さんのフィジカル（身体面）や、心を良く分かっているのも看護師だと思います。看護師でないといけない事は、患者さんの病状をわかった上で患者さんの意思を尊重する、その意思を繋いでいくことだと思います。その人らしく生きるために支援すること、それには、看護実践能力を高めることが、看護の専門性を発揮する事だと思います。看護専門職として患者さんの思いだけでなく、患者さんの状態や病気の進行をわかりながら意思を繋いでいくことができます。一人一人が看護専門職、ジェネラリストとしての力をつけていくことが、多職種、異業種連携が進む中、やらなければいけないことだと思います。

8. シンポジウム 異業種コラボレーション —WIN・WIN・WIN—への想い

1) 3つのWIN

- ・ 1つめのWIN：患者・家族の療養生活における不自由さの解消や軽減
- ・ 2つめのWIN：看護師にとっても効率よく、医療・看護サービスの提供、質の向上
- ・ 3つめのWIN：異業種（企業）にとっても有益、新たな挑戦への機会

この3つがともにHAPPYになる—WIN・WIN・WIN—になるという思いをテーマに込めました。

2) ともにHAPPYになる—WIN・WIN・WIN—にむけて

- ・ 医療現場のニーズを見聞きし、アイデアを出す
- ・ 異業種コラボレーションが企業としても一歩踏み出すきっかけ
- ・ 製品のアイデアは専門家（看護）の意見、支援を受けながら行う
- ・ 日常的なケアにおけるニーズ、難しいニーズに向き合う
- ・ ニーズに対して異業種（企業）のシーズ（知識、ノウハウ、アイデアなど）をどう使うか
- ・ 看護師の困りごとをいかにうまく伝えるか（譲れない

ことや、患者の不自由さを表現する)

- ・患者にとってより良いか、使いやすさだけを求めない、患者に不利益がないか
- ・製品ができた後も、より良いものに改良するためのヒアリングを行う
- ・患者に寄り添いながら、問題解決をしていく
- ・患者、私たち看護師も、企業も満足いくものを生み出す

異業種とのコラボレーションを実現するには、これらの思いがとても大切であると確信しています。

引用・参考

- 1) 総務省. (2022). 情報通信に関する現状報告の概要 第1部特集 情報通信白書刊行から50年～ICTとデジタル経済の変遷～第2章今後の日本社会の展望 第一節 今後の日本社会におけるICTの役割に関する展望 1 今後の日本社会の展望 1) 生産人口の減少.
- 2) 厚生労働省 (2016). 介護人材の需給推計に係る調査研究事業報告書. 2023年12月18日アクセス, <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000136696.pdf>
- 3) 厚生労働省. (2019). 第11回看護職員需給分科会. 2023年12月18日アクセス, https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_07019.html
- 4) 農林水産省. (2023). 福祉分野に農作業を ver.11. 2023年12月18日アクセス, <https://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/noufuku/attach/pdf/pamphlet-8.pdf>
- 5) 伊藤 瑳恵. (2018). 日経デジタルヘルス. 2023年12月18日アクセス, <https://xtech.nikkei.com/dm/atcl/word/15/327920/080300064/>